

平成25年度 科学研究費助成事業（特別推進研究）  
研究進捗評価 現地調査報告書

研究課題名	知識と技術の世代間伝播の霊長類的基盤
研究代表者名 (所属・職)	松沢 哲郎（京都大学・霊長類研究所・教授）

【評価コメント】

本研究は、人間の最近縁種であるチンパンジーとボノボを研究対象に、野外研究と実験研究を組み合わせ、認知機能の生涯発達と世代を超えた知識や技術の伝播に焦点をあてることで、人間の認知機能の特徴を明らかにすることを目的としている。当初目標に向けて極めて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれるといえる。特別推進研究としては5期目にあたり、今期のみ成果を切り出して評価することは難しいが、長期研究によってはじめて可能となる研究の意義は非常に大きい。

初年度（平成24年度）においては、野生状態のチンパンジー（ギニア）とボノボ（コンゴ共和国）の観察研究を行い、その成果の一部は既に国際誌に発表されている。実験研究については、霊長類研究所と京都大学野生動物研究センター・熊本サンクチュアリの二ヶ所に飼育されているチンパンジーを対象に1個体および2個体のテスト場面で多彩な比較認知科学研究が進められている。アイトラッカーを用いた社会的注視にかんするヒトとチンパンジーの比較や、表情認知の脳波測定、表情にもとづく個体識別などは英文一流誌に発表され、国内のマスコミでも大きく報道された。

飼育ボノボを対象とした実験研究についてはまだ始動していないが、平成25年度秋に米国から6頭のボノボを導入予定とのことである。ボノボの飼育施設は、平成22-24年度の最先端基盤支援事業によって既に整備されており、また本特別推進研究によってウォークインブースと呼ばれる実験装置が完成しており受入れ準備が整っている。

目的に掲げられた世代を超えた知識や技術の伝播については、霊長類研究所の第三世代がまだ誕生していない点が、今後達成が望まれる課題である。

経費の執行については、適切に行われており特段問題はなかった。また本研究のアウトリーチ活動（特にホームページの不断の更新）、若手人材育成、国際共同研究については高く評価できる。